

シンポジウム 近世の公家文書と学芸

海野圭介

宮内庁書陵部に現蔵される諸典籍をはじめとして、近世期の禁裏を中

心とした公家文化圏において書写されたテキスト群が、近代国文学研究、とくに和歌や物語を対象とした研究において重要な基盤資料とされてきたことは言を俟たない。伝本研究を中心として、各所に所蔵されるテキストの比較検討は従来も進められてきたが、個別テキストの相互関係への関心に加えて、近年では総体としての典籍群（文庫）を単位とした関係性にも注目が向けられるようになってきている。禁裏御文庫や桂宮、高松宮といった旧宮家の蔵書、また近衛家・冷泉家といった公家の蔵書形成に関わる問題や、その書写・収書活動とその歴史そのものの実態解明を通して、モノとしての典籍（群）の歴史的・社会的意義を考える試みがなされつつあると言える。

平成二十一年度（二〇〇九年度）から平成二十三年度（二〇一一年度）にかけて行われた、国文学研究資料館公募型共同研究（その後、特定研究へ移行）「久世家文書の総合的研究」（研究代表者・日下幸男（龍谷大学））も、右記の動向と軌を一にする、公家に伝領された文書群の復元的研究に基づく、文書群（蔵書群）の形成と伝領の実態解明、及びそ

の歴史的・社会的機能の把握を目的とした試みであった。

久世家は、村上源氏系の堂上新家で、家格は羽林家。久我家十九代・敦通の次男・通式が、江戸初期の元和五年（一六一九）に久我家領下久世村（京都郊外）に所領を分与されて一家をなした。以降明治まで、通式―通俊―通音―経式―通夏―通晃―栄通―通根―通理―通熙―通章と家督を継ぎ、多くの文書を伝えたが、伝領された典籍・文書群は昭和三十年以降に当館を含む幾つかの機関へと移管されることとなった。

当館所蔵の久世家旧蔵文書群については、既に『史料館所蔵史料目録 第三十一集』（国立史料館 一九八〇）として整理され目録が作成されているが、そこに収められた典籍・文書それぞれの概要把握を含む個別の資料調査は事後の課題として残されていた。公募型共同研究（特定研究）「久世家文書の総合的研究」では、当館所蔵の久世家文書の悉皆調査を行い、典籍・文書それぞれの内容につき簡単なコメントを付した調査カードを作成した。併せて、他機関（明治大学博物館、京都大学附属図書館等）所蔵の久世家旧蔵文書類についても一部の資料の調査を試

みた（今後構想されるべきは、久世家旧蔵文書群の復元と総合目録の作成ではあるが、久世家旧蔵文書群の総合的な調査については今後課題を残した）。

最終年度である平成二十三年度（二〇一一年度）には、研究展示「近世の和歌御会二〇〇年―久世家文書にみる公家の文事」（五月二十三日―六月二十四日 於 国文学研究資料館展示室）を開催し、当館所蔵文書及び個人蔵文書の展覧を行うとともに、先記の共同研究をベースに、広く公家文書一般を対象を広げたシンポジウム「近世の公家文書と学芸」（五月二十六日 国文学研究資料館）を開催した。パネリスト及び報告題目は次の通り。

日下幸男（龍谷大学）「久世家文書と古今伝授」

浅田徹（お茶の水女子大学）「堂上から地下へ―典籍の流出・提供

・活用―」

西村慎太郎（国文学研究資料館）「近世公家家職研究の展望と課題」

司会 海野圭介（国文学研究資料館）

右三氏により、典籍を含む近世の公家文書群の形成と流通、及び文書群を生み出す知識の流通と蓄積の在り方について、大別して次の三点をテーマに報告が行われた。

（1）古今伝授をはじめとする種々の古典伝授と禁裏・公家の古典学

（2）知識の伝達経路としての蔵書

（3）伝達する知識の体系を形作り伝える家職意識

各パネリストの報告については後掲の論考を参照されたいが、テ

マのコンテクストについて各論に先立って幾らか触れておきたい。

近世期に書写された公家文書の中には、和歌の稽古や添削、御会関係資料、また、古今伝授をはじめとする種々の古典学と伝授の所産として伝えられたものも多い。こうした資料群は、当代の禁裏や公家の古典学の実際を伝える一次資料であり、近世公家の文事を考える上で重要な資料であることは言うまでもない。近世公家の文化を考える際には第一に検討されるべき分野と言える。現在の視点からのその有用性如何は一且置くとして、堂上の文事と諸学とが近世期の文事の頂点と意識されていたことは確実であり、また、堂上の歌学や古典学が地下へと伝わり、存外に広範で多彩な広がりを持っていたことも近年明らかにされつつある。⁽²⁾ 今後はそうした面への目配りとその意義の積極的な評価も必要とされよう。

また、堂上諸家には、古くより伝領された古典籍古写本や古典作品の新写本も伝えられていた。こうした蔵書は、贈与され、借用され、転写されて流通してゆく。そうした書籍の流通それ自体が古典的知識の流通の一つの形態であったと言えるが、⁽³⁾ 個別の例はともかくも、蔵書群（文庫）を単位として、俯瞰的視点からその流通のダイナミズムが窺われる例はそれほど多くはない。浅田氏の報告された彰考館に代表される大名の蒐書活動など、今後もなお多くの作業と検討がなされるべき分野と言える。なお、大名家の蔵書には姻戚関係を通して集積された多くの堂上諸家由来の美麗な古典籍が含まれることも少なくない。従来いわゆる「嫁入り本」としてテキスト研究から退けられてきた調度本についても、そ

の社会的機能や意味といった面からの再考の必要がある。

近世公家のもとに収蔵された文書群には、冷泉家ならば和歌、吉田家ならば神書というように、家職にかかわる諸資料が多く含まれている。和歌・音楽・鞠・書・装束・鷹・陰陽道といった諸芸・諸学には、それらを統括する家職の家が存在し、それぞれの分野の知識を記し伝える蔵書や文書群を蓄積し伝領した。知識の体系を形作り伝えた家職の形成と展開については主として歴史学の分野において研究が進められているが、文学研究からの検討は、和歌や鞠などの一部の分野の実例報告に偏っているように見受けられる。家職は、典籍・文書群の形成とその機能を考える際には避けることのできない概念、制度であり、幅広い資料調査に基づく具体的な記述の蓄積が求められる分野である。また、堂上公家の周辺で実務を担当し、実際に家政を分担した地下官人の存在形態とその意義についても近年多くの成果が著されている。⁽¹⁾ 動態としての文化活動を考える上では、やはり見落とすことのできない領域と言える。

なお、公募型共同研究(特定研究)「久世家文書の総合的研究」は、平成二十三年(二〇一一年度)をもって終了したが、調査カードやデータについては今後順次公開を進めてゆく予定である。

注

(1) 田島公編『禁裏・公家文庫研究1〜3』(思文閣出版二〇〇三〜二〇〇九)。

吉岡眞之・小川剛生編『禁裏本と古典学』(塙書房二〇〇九)、『国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」』、『同

「8-2」同『奥書刊記集成・解説編』(国立歴史民俗博物館二〇〇九)。

武井和人『中世後期禁裏本の復元的研究』(平成18〜20年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告二〇〇九)、酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵書史的研究』(思文閣出版二〇〇九)など参照。

(2) 神作研一『六窓翁蔵書目録』―松井幸隆の歌学一斑(金城日本語日本文化83二〇〇七)などの一連の研究参照。

(3) 渡辺憲司『近世大名文芸圈研究』(八木書店一九九七)、井上敏幸(研究代表者)『鹿島鍋島藩の政治と文化』(国文学研究資料館二〇〇八)参照。

(4) 西村慎太郎『近世朝廷社会と地下官人』(吉川弘文館二〇〇八)、井上智勝『近世の神社と朝廷権威』(吉川弘文館二〇〇七)参照。